

ゐる、お山は全く黄昏の色に抱擁されて夕闇は自分の足元まで攻めて来た土産館のイルミネーションは殊更
するどく光つて居る。

ゴーンと響く暮合の鐘の音は淋しく夕空に餘韻長く流し谷間を越えて峰へへと廻つて行く三千四百尺の
鷹取の山の端には氷つた様な半弦の月が輝いてゐる……四顧寂莫朝師堂の木魚仁王門の唱題修行の法鼓の音
が夜の静けさを破つて聞えて来る。
おう寒い……身をふるへ乍ら坂を下りた。



思ひ出の記

鳥海山人

三月の末つ方とは言へ、残雪の上を這つて来る風は、かなり膚にこたえるほどであつた、止めどもなくい
らだつて来る心は、一種病的とも思はれた、幼い時から撫でつ、叩きつした根木橋の畔に樹つてゐる柳は葉
は落ち盡して幹は真黒に、何處に春が籠つて居るとも見えない、併し春はきつと来る、春が来て死んだやう
な柳は緑に息ふきかへすのもわづかばかりの間である、然し吾生の春は何時、吾芽の吐くは何れの日であら
うかと、あせる心の抑揚は順調を得て居らなかつた。

此の柳を後にしてから、もう四年も経つてゐる、流石朝からの往來の繁く、立ち並ぶ店の賑合も、成程日
本一の都と思はれた、此の中からは何物かを探し得られるであらうと、先づ一驚したのも過去となつて終つ

た 心の全分を充たし、而うして求める方向を指示して呉れるかと思つて心理學を學んだのも誤りであつた。手取り早く「善」の世界へ導いて貰へさうに考へて倫理學を學んだのも愚な考へであつた、哲學を聞いても人生全部の解決はをろか、寧ろ物淋しい氣が高調して行くばかりであつた、本當の人生の奥底を流れてゐる生命をば、外部から徹底的に理解し汲み取られるやうにして貰へるものゝやうに思ふて來たのは實に低級な皮想の見解であつた、旅から旅へなど、言へば餘りに大袈裟に聞えるが、心はまだ旅から旅へさ迷うてゐる。

或る日曜日の後であつた、せめてもと思ふて友を澁谷に訪ふた、九段坂上あたりから三宅坂の路傍の櫻樹は殆んど落葉した、でも柳はまだ汚れきつた葉を大事さうに蓄へてゐるのが慾深さうに見えた、短い秋の日は、はや西に傾いて、風の音さへ澄み渡つて來た、夕陽を帯びた霞ヶ關一帶は、さすがに夕暮の哀れさを見せてゐる。

友は國から來た母をつれて外出した後であつた、もう五時は過ぎてゐる、入日の影も何時の間にか消えて空には星影寒く數へられた、下町一帶を包む夕靄の中に、まき散らされたやうな電燈も淡い光を動き初めた。

失ひ物をしたやうな氣で餘儀なく其處を去つて再び込み合ふ電車に身を托した、廣小路で降りてから、夜店や群がる人々を外目に見て、御徒士町まで歩いた、葉もまばらに荒んだ街路樹の間から、電燈はあか／＼と光線を投げかけてゐる、何か専心に讀みながら、鈴を鳴らしては、時々、機械的に、「夕刊」「夕刊」と叫ぶ某中學の制帽を被つた一少年が、其の樹下に寒さうな姿を寄せてゐた。

所謂革命も鬭争も、これを餘所事に眺めてゐるうちは、實に痛快に覺える、恰度火災を熱い紅葉と見ることも出来るやうに、色々な悲慘な境遇に置かれた個々の生活も、世相を賑はす一材料として輕視する時は、さまで心苦しくも思はない、然し一たびこれを内觀靜思した時、凋落しかつた秋の寒夜に、斯うして行かねばならない境遇に置かれた彼は、よし目的は異つて居るにもせよ、それが求めんとする努力は異なるまいと

想像し暫し同情の眼を送らずには居られなかつた、昨晚も此處に斯うして居つたのだらう、又あすの晩も、
「樹よ汝はこの一少年の伴侶となつて彼をして必らず幸あらしめよ」と祈つてやつた。

日月晝夜と常に序を追ふて進んで行き、且らくも止ることはない、春は往き秋は來り、又々草木の零落するの時に逢ふた、日は暮れて道遠しの感すら涌いて來る、がしかし、もつと内的生活の革命への旅をば續けて、本當の生命、それは平面的でなしに厚さも深さもある、永遠の生命を握り取るまで、努力して行かねばならない、否斯うして行くこと其のことが賦與された生命其の物へ深さを付けて行くのである。

如何に乾ききつた高原の土も、急がずに、休まずに、穿鑿して行かば、聽てはきつと泉に到達することが出来るのだ、世相に於ける個々の事件、否一草一木もわが爲めに道を傳へ、生命を深める永遠の相手である、畢竟この世界は吾等の活動の舞臺であるよと考へつゝ知らず識らずの間に家に着いてゐた。

以上は余が一昨年晩秋を追懷して記したのである、過去を追憶するやうでは、おれも年をとつたものだから、聊か淋しくもないでもない。



人 生 の 富

長 瀬 龍 光

富は何物かの代價である、何者かの報償として之を受くるのは、貪るべきではなくとも少くも否むべきでは